２０２４年３月３１日（日）＜イースター礼拝＞　　於札幌発寒教会

あ れ は 主 だ ！

（ヨハネによる福音書２１章１～１４節、イザヤ書２６：１９）

本日のイースターは、ヨハネによる福音書２１章１～１４節の、私たちが現在礼拝で用いている新共同訳聖書では、「イエス、七人の弟子に現れる」と言う小見出しがついた個所を説教のテキストにして、イースターのメッセージを聞いてまいりたいと思います。

本来、ヨハネによる福音書は、２０章３１節をもって終わっていた、と考えられています。では、２１章は何か、と言えば、後で加えられた付録か補遺のようなもの、と言うことになります。しかし付録、或は補遺とは言っても、内容は深く、豊かで、決して軽々しく扱うことは出来ません。此れは、本来のヨハネによる福音書の著者自身が、後になって、付録、補遺と言う形ででも、加えておいた方がよいと考えて、自らの手で加えたものなのか、それとも別の人物、とは言っても、本来の著者の弟子か、その影響を受けた者が、編集の最後の段階で加えたものなのか、よくは分かりませんが、繋がりに決してチグハグな感じはなく、むしろ自然な感じさえします。最終的にこう言う形になった、と言うことには、そこに明確な編集の意図があったからだ、と言うことは確かです。このヨハネによる福音書は、書かれた後、日曜日の礼拝の度ごとに、繰り返し、繰り返し読まれてきました。礼拝に集まった者たちは、まるで説教を聴くように、この福音書の朗読に耳を傾けたことでしょう。そして、２０章から２１章に移る時には、きっと当然の流れのように、此れを聴いたことでしょう。

２０章で描かれていたのは、復活のキリストに出会い、直接キリストからその息、即ち聖霊を吹きかけられ、伝道の使命を託されて、世に派遣された弟子たちのことでした。最後まで頑強に抵抗していたトマスも、結局は、復活のキリストに捕らえられ、遂には、最高の信仰告白にまで導かれました。その直後に、何が起ったか。誰もが予想し、期待するのは、華々しい弟子たちの活躍や、目を見張るような数々の成果についての報告ではなかったでしょうか。しかし残念ながら、そうではなかったのです。２０章に続く２１章では、何と、弟子たちは、元の漁師に戻って、湖に漁に出掛け、それも惨憺たる不漁で、すっかり気落ちしている、情けない姿の弟子たちを、遠慮会釈なく描いています。礼拝に集った者たちは、そんな弟子たちの姿に、失望したでしょうか。否、却ってむしろ、こんな弟子たちの姿に、自分たちの姿を重ね合わせて、我がことのように聴いたのではなかったでしょうか。彼らも亦、日曜日の礼拝で、折角、復活のキリストとの交わりを新たにされ、平安に与り、励ましを受け、使命を託されて、世に送り出されたのに、この世の生活に戻り、あくせく働く内に、まるでキリストに出会ったことなどなかったかのように、或は、すっかり忘れてしまって、完全にこの世の生活に呑み込まれ、しかも中々思うような成果が上がらないために、ただ疲労感と虚しさだけが後に残る、そんな毎日を送っていたのではなかったでしょうか。ですから彼らは、２１章に描かれている弟子たちの姿を、決して他人事としては聴けず、身につまされる思いで、ジッと耳を傾けて聴いていたに違いありません。そして、そんな弟子たちに、主イエス御自身の方から近づいて、元気をなくしている彼らに、声を掛け、思いに優る祝福に与らせ、慰め、励まし、希望をお与えくださる主イエスのお姿に触れて、彼らは、此れと同じことが、また自分たちの身にも起こり得るのだ

と確信し、思い新たに、また出直そう、と固く決意したのではないでしょうか。私たちも、そんなふうに、今日の箇所を、自分の身に当て嵌めながら、読んでいくことによって、力と慰めを得たいと思います。さて、早速、最初の部分を読んでみましょう。

「その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現わされた。その次第はこうである。シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。シモン・ペトロが、『わたしは漁に行く』と言うと、彼らは、『わたしたちも一緒に行こう』と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった」。ティベリアス湖とは、ガリラヤ湖のことです。シモン・ペトロの実家は、この湖畔近くにありました。主イエスの１２弟子の内、イスカリオテのユダ一人を除いて、他の１１人は、皆ガリラヤの出身でした。そのため彼らは、ガリラヤに戻っていたのでしょう。復活のキリストから伝道の使命を託されたものの、実際にはどうしてよいのか、まだよく分かっていなかったためか、それとも、チョッと遣り出してはみたものの、直ぐに行き詰まって、何か別のことをしようと、昔を思い出し、もう一度漁師をしようと考えたためか、いずれにしても弟子たちは、シモン・ペトロの、「わたしは漁に行く」、と言う言葉に引っ張られるようにして、皆一緒に漁に出掛けたのです。此処に挙げられている弟子たちは、ペトロ、トマス、ナタナエル、ゼベダイの子たち、即ちヤコブとヨハネ、それに、ほかの二人の弟子、とは恐らくアンデレとフィリポのことであったろう、と考えられますが、全部で７人です。何故７人かは分かりません。が、意気消沈していた弟子たちが、一致を欠いて、一部は群から離れていた、と想像しても、あながち的外れな想像とも言えないのではないでしょうか。この７人の内、ペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネは、元々ガリラヤ湖の漁師だったのですから、漁のことなら、昔取った杵柄、ガリラヤ湖も、勝手知った自分の庭のようなものでしたから、何の抵抗もなく、スッと元に戻れたでしょう。ところが、一晩働いたにも拘わらず、何も獲れませんでした。ヨハネによる福音書１５章５節に、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである」、と言う主イエスの言葉があります。弟子たちは、キリストの枝とされた者たちなのです。枝である弟子たちが、幹であるキリストから離れて、自分の経験と知恵と力だけを頼りに、それでもやれると信じて、実際にやろうとしたのですから、何も獲れなかったのは、考えてみれば、当然のことだったのです。

しかしこの時、そんな彼らを、主イエスは岸辺に立ち、温かい眼差しを向けて、ジッと見守っておられました。ところが弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった、と言います。朝靄がかかっていたためだった、と説明している注解書がありましたが、それよりも、どっぷりと日常性に浸っていた弟子たちは、霊の眼が曇ってしまって、彼らを見守っておられる復活のキリストが見えなくなっていたのでしょう。この時、主イエスの方から、弟子たちに声を掛けられました。５節以下を読んでみます。

「イエスが、『子たちよ、何か食べる物はあるか』と言われると、彼らは、『ありません』と答えた。イエスは言われた。『舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。』そこで網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、『主だ』と言った。シモン・ペトロは、『主だ』と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻ってきた。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかった

のである」。一晩働いて、一匹の魚も獲れなかったのに、主イエスのお言葉に従い、言われた通り、舟の右側に網を下ろすと、最早網を引き上げることが出来ない程、多くの魚が獲れたと言います。“右側”とは、旧約以来“祝福のしるし”です。マタイによる福音書２５章に出て来る最後の審判の譬え話で、祝福される羊は右側に置かれ、罰を受ける山羊は左側に置かれています。今日の箇所でも、主イエスは、「舟の右側に網を打て」、と指示しておられます。しかし、“右”と言うのは飽く迄も“祝福のしるし”であって、右と言う場所そのものに祝福があるわけではありません。此処で大切なのは、弟子たちが、主イエスのお言葉に忠実に従った、と言う事実であって、従ったからこそ、其処に祝福が備えられていることを彼らは発見出来たのです。獲れた魚を引き上げることに、夢中になっている弟子たちの中で、ただ一人、“イエスの愛しておられた弟子”だけが、声の主はイエスだ、と気付き、「あれは主だ！」と叫びました。と同時に、弾かれたように、裸同然の姿であったペトロは、慌てて服を身に纏い、湖に飛び込んで、一刻も早くイエスの元に辿り着こうと泳ぎ出しました。岸までは僅か二百ペキスしか離れていなかったからです。１ペキスは約４５センチですから、凡そ９０メートルです。「アダムとエヴァが罪を犯した時、彼らは、自分たちが裸であることを知って、いちじくの葉で体を覆い、神の顔を避けて、園の木の間に身を隠した」、と言う話が、創世記３章７節以下に記されています。ペトロは、裸の体を覆いはしましたが、キリストを避けるどころか、却って一刻も早くキリストに近づこうとしました。キリストは、人間の罪を暴くだけではなく、何よりも罪を赦す方であることを、ペトロは思い出したからでした。

さて、陸に上がってみると、炭火がおこされ、その上には魚が載せてあって、パンまで用意されていました。主イエスは、全てを整え、弟子たちを待ち受けておられたのです。１０節以下を読んでみます。「イエスが、『今とった魚を何匹か持ってきなさい』と言われた。シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。イエスは、『さあ、来て、朝の食事をしなさい』と言われた。弟子たちはだれも、『あなたはどなたですか』と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である」。主イエスが、弟子たちのためにご用意くださっていたのは、朝の食事でした。しかし、食事の途中で、主イエスがパンを取り、弟子たちに与え、魚も同じようにされた、と言うことは、五つのパンと二匹の魚で五千人もの人々を養われた、と言う６章に出て来た「五千人の給食」の話を彷彿とさせますが、それ以上に最後の晩餐、更には、それに基礎を持つ聖餐式を、私たちに思い起こさせます。実は此処では、私たちが日曜日の度ごとに守っている礼拝のことが、それとなく語られているのです。主イエスは、「今とった魚を何匹か持って来なさい」、と言われました。此れは、献金に象徴される捧げ物のことです。礼拝は、主イエスが全てを整えて、招いてくださるのですが、しかし私たちは、ただ受けるだけではなく、受けた祝福に感謝して、その一部をお捧げするのです。そのことによって、礼拝は一層喜ばしく、豊かになるのです。次に、獲れた魚は百五十三匹で、しかも魚はいずれも大きかったにも拘わらず、網は破れなかったと言います。百五十三匹とは、一体何を指すのか、昔から色々なことが言われてきました。しかし、此れだと言い切れるものがありません。恐らく、当時知られていた魚の種類が百五十三種であったとか、世界の民族の数が当時百五十三と言われていたとか、そんな所から、この数字が出てきたのではないか、と言われるのですが、大切なのは、これほど多くの魚が入ったのに、網は破れなかった、と言うことです。教会には、世界中の

人々が、どんな民族、どんな人種、どんな出身の人であれ、誰もが招かれています。しかも、招かれる前には、どんな違いがあったにしても、主にあって一つにされるのです。「網が破れなかった」、とは、そのことを指しています。もう一つ私たちが、此処で見落してならないのは、１２節後半の、「弟子たちはだれも、『あなたはどなたですか』と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである」、と言う言葉です。弟子たちは、主イエスの豊かな持て成しを受けることによって、復活のキリストが彼らと共にいてくださることを、最早疑うことなど出来なくなっていたのです。それと同じように、私たちも、日曜日毎に礼拝に招かれ、主イエスの豊かな霊の持て成しを受けることにより、復活のキリストを、イエスは今も生きておられると言うことを、確かな事実として、確信出来るようになったのです。＜**間**＞しかし、折角確信を得ても、世に送り出され、日常の生活に戻り、日々の労働に従事するうちに、その確信は、何時しか掻き消え、まるでキリストがおられないかのように、自分一人で頑張り、その結果疲れ切って、週末を迎えることが屡です。＜**間**＞しかし主はそんな私たちを、再び礼拝へと招き返し、豊かな霊の持て成しに与らせ、確信を取り戻させてくださるのです。そして、此の確信を抱いて、再び此の世へと送り出してくださるのです。

主の復活は、週の第一の日、つまり、日曜日に起こりました。そのため、永年土曜日に守られてきた礼拝は、日曜日に守られるようになりました。言わば、日曜日に礼拝が守られるのは、週ごとに、イースターを祝っているようなものなのです。このイースターに当たり、そうした本来の日曜礼拝の意味を、再確認し、今まで以上にこれを大切にし、事実、生ける主と相見（まみ）え、主と共なる歩みを、いよいよ確かならしめて行く教会、また、これに連なる一人一人でありたく思います。

（三輪恭嗣）